

生ものは、腐る。なんでも、とりあえず、冷蔵庫に入れる。とくにいたみやすいものは、慎重丁寧な扱いが要る。私は、毎晩、湯に漬け浄めたあと、冷凍庫に、こころは仕舞う。自身全身を冷やすわけにいかない。入れ替りに出した水をグラスにとり、なるだけ多くアルコールを注ぎ、からだに流しこむ。体内からの消毒。どうやら、ヤフで、粗陋の品らしい。喰いもんは腐る直前がうまい、とは云うが、ご飯は炊きたて、パンがつて、湯気のあがっている焼き立ては、とびきり美味しい。

児向けの唄で、「アあさ、いちばん早いのは、パン屋のおじさん」というのは、フランスあたりの、家にかまどがない、下町のアパート住民のさまで、こどもが朝食用のパンを店に取りにいく習慣を歌っている。ママが言いかせている。「パンやさんは、けさもおいしいパンがたべられるよう、くらーいうちからおしごとしているのよ。さあ、おきて。いつきなさい」。いまだ、重いツイードのコートをはおらされて、吐く息白く、おちびちゃんは、パリの石畳みの小路をとほとほ歩いているだろうか。「おはよう」の笑みをもらい、バケットを両手で胸に抱え、ぬくもりを持ち帰る。この、人と人がつくる「あったかさ」を学んでいるだろうか。

……パリっ娘のサラは、東京にきた留学生で、学生食堂をつかうを控えていたふうだった。朝、一限まえの教室で、クロワッサンに魔法瓶に用意してきたカフェ・オレで朝食をとっていた。

まちかど

彼女は、ちよくちよくこぼした。ニッポンは豊かだというけど、朝に開いてるパン屋がないわ。二ッポンは豊かだというけど、そろ、私たちが食するのは、文化であって、モノではない。モノのみでは、あなたをあたためることはできなかつた。二十年まえでなく、いまなら、サラはここ的生活を受け入られるだろうか。食べパンにカビを見つけた。血色の悪い娘の頬のそばかすみたいだ。灰色の講堂、壁に吸い込まれていくか細い声を思い出す。ちかくに、夫婦できりもりするパン屋さんがいる。始業まで、ちよっとの間があつた。奮発して、一斤のホテル・ブレッドをもとめに行き、小走りで事務所に戻る。レンジでトーストしようとして、出来立てだ、このまま食べようと思いついた。やおら、電話話が鳴る。呑みくだすようにして、あわてて、残りの四つ切が棚代わりのレンジの中へ。そうやって、そうして、忘れた。日を戸口に置いてしまった。しばしばやつてしまふ。今日に限つて、旧友の横顔が浮かぶとは、どうしたことだろう。平生、一二、三日ほつたらかしても、かびないやつを口にしている筈(とが)か。それでも、やんぬるかな。

防腐処理された食べ物を摂っている。そんなモンは身になるのか。食べづけて、平気なのか。当分当面は大丈夫とされないのであるのだろう。が、あつたかさを生むエネルギーにはならない。あることとひきかえに失ったためにかに気づくのは、後からだ。今宵、湯で世塵を落としたら、冷めないうちに、手紙を書こう。メールでなく、久しぶりにカードを贈ろう。ああ、そうだ。サラの誕生日が、ちかいじゃないか。

グット・ライフ

goodlife@cosmos.ocn.ne.jp

Tel 0463-37-1955 みらいごーごー

Fax 0463-37-1966

あなたのそばの保険屋さん 神奈川・平塚・立野町3965

八間通り沿い・済生会病院並び北へ八歩



We wish "May be your good Samaritan every night and day."

marge

50

あなたのそばの
保険代理店
グット・ライフ



ミツバチは蜜源の方角と距離をダンスで仲間に教える。方角は、太陽の方角と目標の蜜源の角度を記憶し、巣の中で巣板の垂直方向に対し同じ角度に向って、尻振り走行する（図は、40度角を追従バチに教えるところ）。では、距離はどう教えるか？



あなたの身近な問題に応えるのが、私たちグット・ライフの仕事です。ぴったりサイズの安心をおあつらえ致します

マユさん、お宅でのサロン・コンサートに毎回招いてくださり、感謝。春の陽さし、一塵の薰風と諧和する名匠フェイギンのチエロ。

開放こそ進歩

伊勢田 洋次

◆時代は約50年前に遡る1960年代、私は大手筆記具メーカーの平塚工場で働いていた。この工場では主生産品の万年筆を毎月30万本程度生産していた。万年筆は軸にキャップをする式のもので、多くの製造特許を持っていた。特に研究開発には熱心であり、当時、画期的且つ特長的な新製品として「キャップのない構造の万年筆」キャップレスを発表した。目新しいデザインと多くの特許権を擁し、他社に追従を許さないこの商品は確かに脚光を浴びていた。しかし、逆に競合相手がないためか、爆発的に売れるではなく、独自に進化するでもなく、いつしかマーケットから取り残されていた。

◆時代は流れ1970年代、東京大学の先生坂村健さんが開発した基本ソフト「TRON」が脚光を浴びた。トロンはユビキタス「至る所に存在する」をキーワードにする独自のOSである。冷蔵庫、携帯電話カーナビ、エンジンの制御装置など多方面にわたって利用されている。しかしウインドウズのように画面で見えないので利用者はトロンに気づかない。しかも利用料は無料である。坂村教授は言う。「情報技術を支えるOSは誰にでも開かれているべきだ」と。

◆さらに現代、トヨタ自動車が、保有する燃料電池車関連の特許を無償で開放し、他企業が自由に使えるようにする事が紙上に紹介されていた。これはハイブリッド車の技術を開放せず抱えこんだ為、世界の新車市場でのハイブリッド車の比率が伸び悩んでいる現実が決断の背景にあると言う。そしてこれは「技術は抱え込むばかりが能ではない」との証明であると記事は締めくくっていた。

◆ことごと左様にどのような場面でも「独り占め思考」で利益を独占する方法と「開放思考」で全体の利便を目指す方法があり、どちらに傾いているかによって行動パターンが決まってくる。自由な発想と適正な競争を阻んでいる不自由な仕組みの拘束から解放された時、人は初めて開放が味わえるに違いない。進歩、改革を伴わない保守的、閉鎖的体質を持つ会社や業界に将来の繁栄は訪れない。思い切って開放路線に舵を切るべきであり、これこそ明るい未来を切り開く唯一の途である。

時代より數千年、持続のみで、あの谷島は、世界に二〇とならない。それが、どうやってこれたのか、どうやって生きていった。そんなミステリ延べる。

「鶴は千年、亀は万年」と言うように、鶴は長命の瑞禽とされる。鳥類の寿命の調査はほとんどされていない。実際のところ、よく分からぬトリばかりのようである。「かごの鳥」で長生きしたところで、それがライフ(生命、生活)の質がいいことにはならないだろう。ツルは渡りをする。なかには、チョモランマの頂の上を飛んで、営巣地を変える種がいるときく。もっと低いところはいくらでもあろうに、なにを好きこのんで、最高峰を越えていくのか。きっと、「そこに山があるからだ」とでも言い返してくれるのだろう。あるいは、「毎年、この上を飛ぶと、元気がでるんだよね」

さすがに、千年とは生きないだろうが、数十年生きるとすれば、より快適な環境をもとめて、移動=渡りをするのは、理解がいく。

ところが、四ヶ月程度の命の蝶が渡りをするのだそうだ。それも、つい最近1981年に分かった。日本にいるアサギマダラ。海と国境を越え、移動していく蝶は、いまのところ、世界でこの一種しか知られていない。その距離、2000km超。60日ほどで渡っていく。たとえば福島のデコ平から、奄美の喜界島まで。その上、外と見もよい、浅葱色の地模様がシック。たっぷり、全長10cmにもなる美丈夫。「てふてふ」と舞うしかない、握ればクシャとつぶれてしまう羽で、この大旅行をする。尋常な行動とは思われない。摩訶不思議だ。不思議には、魅かれていく人が出る。栗田昌裕さんらが惚れ込んで研究している(『謎の蝶アサギマダラはなぜ未来が読めるのか』PHP)。□



ムシの幼虫、チョウなら青虫は、好き嫌いがはげしい。ほかの種と、えさのとりあいにならないようによっていると捉えれば、生き残っていくために棲み分けている共存主義でやってきてる。殺し合いをしないのだから、平和主義者(?)だ。庭に蝶を呼び寄せたいなら、まずは、柑橘類を植える。びみやうな好みがあるのだが、レモンの木一本、アゲハが遊ぶお庭ができる。楠の大木には、アオスジアゲハが舞う。クスノキが食草。モンシロチョウは、西アジア原産だが、人類の、キャベツなどのアブラナ科の栽培の拡大とともに、身近な蝶になった。アサギマダラは、なにを喰うかといえば、捕食者の鳥類がきらう毒草を青虫が食べる。毒はある種のアルカロイドで、ひとさまも好まぬので、畑はない。卵はてんで、まばらに産みつけられる。

成虫になってからも、かなり面倒な生き方をする。蜜を選ばずに吸っていればよさそうなのだが、きわめつけ、なのだ。昆虫は、交尾のために、フェロモンという類の微量物質をつくりとする。オスがメスを引き寄せるための、特殊な香水のたぐい。メスが近くにいるオスに気づかなければ、むやみにふわふわするだけで、子孫がのこせない。いのちがけ。なのに、アサギマダラは、体内でフェロモンをつくるらしい。どうするか。蜜のなかにフェロモン物質がある花を、せっせつか、あさる。いつちよ前になるために、特別な花のあるところ、あちこちから集まってる。

そうした男衆の寄せ場のひとつが、デコ平。四、五日の間に、万と群がるそうである。福島で羽にマーキングされた蝶が、後日、奄美で見つかる。一頭だけでなく、数頭捕獲される。単年でなく、毎年見つかる。兵庫や和歌山で捕まる。中継点らしい。なぜに、渡るのか。

いろいろ仮説はたてられているようだが、それらしい理由は見つかっていない。

鶴の集団とは違い、どの個体も初経験なのに、どうして大旅行ができるのか。謎。

栗田さんは、本の前書きで「一見小さな生き物がこの地球上で長い旅をしながら、想定外の無数の出来事を切り抜けて生き延びていくためには、人間の通常の『理解の範囲(すなわち、常識)』をどのように超える必要があるか」と言う。

平易な文章。一読、感じ、考えることを促す良書と思う。お手にとられたい。